法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

アイルランド地名考

松岡, 利次 / Matsuoka, Toshitsugu

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
113
(終了ページ / End Page)
127
(発行年 / Year)
2006-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002780

Hosei University Repository

アイルランド地名考

松　岡　利　次

地名の誕生

物語が地名を誕生させ，地名は物語によって意味づけされる。アイルランドの神々が勢ぞろいする『マグ・トゥレドの戦い』[1]で，女神モリーガンは主神ダグダに言った。「私はシュケートゥネに行って，フォウォレ族の王インデフ・マク・デー・ドウナンを討ち，彼の心臓の血と，剛勇さの腎臓を体から抜き取ってやりましょう。」彼女はウニウスの浅瀬で待っていた者たちに，二すくいの血を両手に与えた。この王を殲滅したことにちなんで，その砦はアートゥ・アドミルテ「殲滅の浅瀬」と呼ばれるようになった。

意味をもった地名は別の物語を作り，物語は物語を呼び起こす。地名は物語の構造を形成する装置であり，物語の存在証明でもある。英雄物語の集大成である『クアルンゲの牛捕り』[2]の多くのシーンが地名譚モデルでできている。

メーヴ女王とアリル王率いるコナハト軍と，それに相対するウラドの英雄クー・フリンが戦闘をする場所に，つぎつぎと地名がつけられていく。クー・フリンは敵軍の先回りしてアートゥ・グレンハへ行った。そこで一刀のもとに木を切り倒すと，その木を川の真ん中に突っ立てた。そこに敵軍のエイルとインデルとそれぞれの戦車手であるフォイヒとフォフラムがやってきた。クー・フリンは彼らの首を刎ねると四本の枝に突き刺した。それによりここはアートゥ・ガブラ「枝の浅瀬」と呼ばれるようになった。敵軍の先遣隊が到着し，突き刺さった四つの首と傍に刻まれたオガム文字を発見する。「一人の者が，片手で，この木を突き立てた。フェルグスを除く汝らのだれか一人が片手でこの木を突き立てぬ限りここを通ってはまかりならぬ」とあった。ウラドからコナハトに亡命していたフェルグスが言う。「これに驚くことはない。しかし，木を引き抜いてみよ。それが一刀のもとに切り倒されたものであれば，それは驚愕すべき

Hosei University Repository

ことだ。」

アートゥ・フーイットでクー・フリンが泳いでいた。フロイヒが彼に挑み，水中で戦った。フロイヒは死んだ。その浅瀬はそれ以後アートゥ・フロイヒ「フロイヒの浅瀬」と呼ばれるようになった。コナハト軍が彼の亡骸を野営地に運んで弔っていると，緑の服を着た女の一団がやってきて，その亡骸を，後にシード・フロイヒ「フロイヒのシード」と呼ばれるようになる妖精の塚へと運んで行った。

アイルランド英雄物語の長編『クアルンゲの牛捕り』はこのように，短いエピソードを次々と織り重ねていく地名譚的物語手法とも言うべき作品構成になっている。

ディンヘンハス

物語の存在証明である地名をエピソードで説明する地誌集成が残っている。9〜12 世紀に成った『ディンヘンハス』（地誌）[3] である。ディンヘンハス（Dindshenchas）の意味は，dind「山，有名な場所」と，senchas「伝説，故事，歴史」から成り，「有名な場所の故事」という意味で使われた。地名の由来を語るこの地誌は，物語を維持管理する詩人・歴史学者たちの学問の基礎の一つとなった。現在残っている写本は『レンスターの書』（1160 年頃）に収められているものが最も古い。『バリモートの書』（1400 年頃）に収められているものはよく整理されていて，散文の説明と詩から構成されている。上王の居所タラからはじまり，時計回りに，アイルランドの五国，ミー，レンスター，マンスター，コナハト，アルスターの順に各地域の地名考が詠われる。

スナーウ・ダー・エーン「二羽の鳥の泳ぎ」についての地誌。由来は？難しいことではない。コナルの息子のイムハドの息子のフィアクの息子のナルがコナハトに住んでいた。妻はエスティウという女戦士であった。クルアハン・ドゥブティレ出身のデルグの息子のブイデは彼女の恋人であった。ブイデと彼の義兄弟であるルギドの息子のルギルの息子のルアンは二羽の鳥の姿になってエスティウを訪れ，もの悲しい歌を歌い，みなを眠らせた。眠っている間に二人は元の姿に戻り，ブイデはエスティウと寝た。ナルはドルイドにこれらの鳥たちはどこからエスティウのもとに来たのかとたずねた。ドルイドは彼らが鳥の姿をしたブイデとルアンであると言った。

Hosei University Repository

翌日，彼らがやって来てシャノン川を泳いでいると，エスティウが会いに来た。ナルはあとをつけてきて鳥たちを撃ち，一撃で殺した。「二羽の鳥の泳ぐ浅瀬」というのは鳥たちが泳いでいたことからそのように名づけられた。しかし，ルアンに虫の息が残っていて，彼は川を上りアートゥ・ルアン（現在の英語名アスローン）で死んだ。彼にちなんでアートゥ・ルアン「ルアンの浅瀬」となったのだ。エスティウはマグ・エステンへ行きそこで死んだ。彼女にちなんでマグ・エステン「エスティウの野」と呼ばれる。ナルもまた妻を失った悲しみのあまり，モイン・ティレ・ナリ「ナルの地の原」で死んだ。

この例のように，記されている故事・伝承は，一見，口承で伝えられたもののように見える。しかし，実際はマク・リアグ（1016年没）やクアン・ウア・ロトゥハーン（1024年没）やフラン・マニシトレフ（1056年没）の作とされている詩が入っていることからも推測できるように，むしろ書かれたものとして伝えられたものであるようだ。説話伝承をそのまま編集したのではなく，必要に応じて伝承をつなぎ合わせたり，改変したり，補って纏め上げているのである。歴史上の人物よりも神話上のトゥアタ・デー・ダナン族の人物がより多いことから見ても，地名についての歴史というより，地名の由来についての詩人学者による因果関係の創作，すなわち名祖に基づかせるように，地名のもとを人名に解釈しなおすという面が多分にある。『ディンヘンハス』の興味は好古的であり，11，12世紀の学者による説話集と考えた方がよい。

スナーウ・ダー・エーン

狂気のスヴネはアイルランド中，岩の裂け目，つたの茂み，入江から入江，峰から峰，谷から谷へと飛び回り，厳しい自然をモノローグで詠う。凍てつく風が私を裂き，雪が私を痛めつけ，嵐が私を死へ引き入れる。クルアハーン・アイレの頂きの，悲しきは我が叫び。グレン・ボルカーンからイーレへ，ケン・ティーレからボルヘへと響き渡る（『スヴネの狂乱』12世紀[4]）。

スヴネはまた飛び立ってシャノン川のほとりスナーウ・ダー・エーンの教会に着いた。そこは今，クルアン・ボレンと呼ばれている。クルアン・ボレンは英訳名クルーンバレンで，ロスコモン州大修道院のあったクロンマクノイズのシャノン川の対岸にある。

同じこの二羽の鳥の浅瀬（Vadum Duorum Auium）で聖パトリックはシャ

Hosei University Repository

ノン川を越え，アイの野に向かっていたと，ヒベルノラテン語で書かれた『アーマーの書』(807年）のティーレハーンによる聖パトリック伝にある。ここは異教とキリスト教が重なる場所であったのだ。金髪のエトゥネと赤毛のフェデルムという娘たちを育てたドルイドのマイルとカピトラウイウムは，それを聞いたとき，娘たちが聖人を受け入れるのではないかと恐れ，怒り，アイの野を夜の闇と濃霧で覆った。誰の力によってこのようになされたかは定かではないが，この状態の夜が三日三晩続いたのは確かである。聖人たちは三日三晩断食してずっと膝を折り，百回の祈りによって，王たちの王である神に祈った。すると，すべての魔力の邪悪さはアイの野から消えた。

スナーウ・ダー・エーンを英語に直訳するとSwim-Two-Birdsとなる。フラン・オブライエンはこの地名から『スイム・トゥー・バーズにて』(1939年）という小説を生み出した。この作品では，語り手が作家を主人公とする小説を書こうとしていて，その作中の作家は自分自身，作品を書こうとし，その作品の作中の人物がその作家を題材とする小説を書こうとしている。作家は小説の書き出しを考えるが，その中にフィン・マク・クウイルの話もその可能性の一つとする。

語ることといたしましょう，とフィンが言った。さあまた始まるぞ，とファリスキーが言う。まずもって甘美な言葉，麗しい調べで朗誦するのはスウィーニー狂乱の訳と第一原因，とフィンは言った。

フラン・オブライエンが仕組んだのは，時の逆転である。3世紀のフィンが7世紀のスヴネの狂乱を朗詠しはじめた。3世紀の過去の者が現在に蘇り，未来である7世紀を予言して語るという趣向である。

「アイルランド」の語源

もう一つ，地名考として重要な文献がある。11世紀に創作された神話的歴史書『アイルランド来寇の書』[5]である。この書は，キリスト教伝来以前のアイルランドの歴史を聖書の記述に結びつけ，また調和させようとしたもので，キリスト教文学の他にも土着の神話や伝承を取り入れている。地名に関連して，有史前最後にアイルランドに来寇したアイルランド人の神話的な祖先であるミールの息子たちの首長たちの名前が，地名の名祖となった例があげられている。ブレグ平野の名祖はブレゴ・マク・ブレガーン，フーイット山の名祖はフアト・

Hosei University Repository

マク・ブレガーン，ムルテウネ平原の名祖はムルテウネ・マク・ブレガーン，コルク・ライデの名祖はルギド・マク・イータ，ブラドマ山のロス・ナールの名祖はナールなどである。

このミールの息子たちの詩人アワルギン・グルーンゲルは，バンヴァとフォードラとエーリウの姉妹に，アイルランドがこれら姉妹の名前で呼ばれることになるであろうと約束した。

エーリウは言った。「予言者があなたたちの来訪を昔から予言していました。この島は永遠にあなたたちのものになるでしょう。世界の東までこれほどよい島はないでしょう。いかなる種族もあなたたち以上に増えることはないでしょう。」

「それはよいことだ。その予言はよい」とアワルギンが言った。

「彼女に感謝することはない。われらの神々とわれらの力に感謝すべきだ」とミールの息子たちの長老であるエーベル・ドンが言った。

「お前はこの島から何も得るものはないであろうし，お前の子孫も続かないであろう」とエーリウが（エーベル・ドンに）言った。

「私にお礼をして，ミールの息子たち，ブリョガンの子らよ。私の名をこの島の名にしてもらいたい。」

「主たる名になるであろう」とアワルギンが言った。

近世になっても，「バンヴァ」や「フォードラ」がアイルランドの雅称として用いられるが，アワルギンが予言したように最後に残ったのはエーリウだった。英語名 Ireland の語源は「エーレの土地」である。現代アイルランド語のエーレはエーリウの与格形，英語の雅称エーリンはエーリウの属格形である。

エーリウという人名が地名になった後，この地名が人格化する。その代表例は，17，18 世紀の，イギリスの支配されたアイルランドの状況を嘆き，復活を幻想する詩，アシュリンゲ（夢）である。エーガーン・オー・ラヒレ（1728 年没）の「フォードラの傷」。優しいエーリン，もてなしと正しい知識を持った美しい乳をやる母。私たちはエーリンを失った。ゲール人はその優しい資質，慈悲ともてなしとマナーと甘い音楽を失った。邪悪な猪どもが私たちを抑圧している。神のひとり子よ，ゲール人を救いたまえ。17 世紀のダヴィー・オー・ブルーダルもエーリンに向かって問う。豊かにカールした髪を編んだ方よ，なぜに情欲に惑わされ，バンヴァの血を打ち捨てたのか。あなたがかつて誠実に愛した英雄たち，フィニアンの長フィン，クー，カルブレ，フェーリム，ロイ

Hosei University Repository

ガレ，百戦のコンを。肥沃ななだらかなマントが軽薄なサクソン人の有象無象に踏みにじられたのを見ると胸が痛むのだ。

20世紀初頭になっても，パトリック・ピアスの詩『私はエーレ』がある。私はエーレ，ベアの老女より年上で，勇者クー・フリンを生んだ私の栄光は偉大だ。子供たちが母親を売ったという私の恥辱は深甚で，私はエーレ，ベアの老女より孤独だ。

傷つき，哀愁をたたえるエーリウのイメージは，経済発展し，豊かになった現在のアイルランドにも根強く残っている。

地名の書である『ディンヘンハス』，『アイルランド来寇の書』に加えて，アイルランドの人名や氏族名の語源的注解である『コール・アンマン』（名字義）[6] がある。これら四書はいずれも11，12世紀のアイルランド全体が一つの国という意識が生まれはじめた頃成立したものである。国全体の歴史を編修し，人名録を作成し，地名を確定し標準化するということにより国の基礎ができあがったわけである。

『マグ・トゥレドの戦い』の現存するものの最古のものは11世紀に書かれたと考えられる。その中にある地名の列挙は，アイルランドの全体的領有権の存在を反映しているのかもしれない。

ルグは酌人にいかなる力があるかと尋ねた。「アイルランドの十二の主要な湖をフォウォレ族のところに運ぶが，たとえ彼らののどが渇いていても，それらの湖に水が見つからないようにしましょう。その湖とは，ロホ・デルグ，ロホ・ルムニグ，ロホ・オルブセン，ロホ・リー，ロホ・メスカ，ロホ・クアン，ロホ・ライグ，ロホ・ネハハ，ロホ・フェヴイル，ロホ・デヘド，ロホ・リアハ，マールロホです。するとフォウォレ族はアイルランドの十二の主要な川に向かうでしょう。ブアス，ボーアン，バナ，ネウ，ライ，シナン，ムアド，シュリゲフ，サウィル，フィン，ルルテフ，シウール（英語化名は，ブッシュ川，ボイン川，バン川，ブラックウォーター川，リー川，シャノン川，モイ川，スライゴー川，アーン川，フィン川，リフィ川，スイール川），これらの川すべてをフォウォレ族から隠し，水一滴たりとも得られないようにしましょう。」と答えた。

Hosei University Repository

地名の英語化

このようにして，アイルランド語の地名が確立したところに，英語が侵入してくる。アイルランド語の地名の英語化はすでにアングロ・ノルマンの時代には始まった。ミチェルズタウンのようにタウンが付くものがその例である。しかし，地名に強い影響を与えるのは17世紀の植民からである。

アイルランドの地名の多くはアイルランド語起源で，シュリアヴ（山），イニシ（島），ロホ（湖），アウン（川），アス（浅瀬），キル（教会），ドゥーン（砦），バレ（町），マー（野），ボン（河口），クロホ（石），クルアン（草地），クノク（丘），グリャン（谷）などが基本的な地名の要素として頻出する。

アイルランド語の地名を英語に変える方法としてはつぎのような方法がある。(1)原語の音になるべく近く，英語で発音しやすくする。例，ウォーターフォード州の Dungarvan（アイルランド語 Dún Garbháin ドゥーン・ガルヴァーン）。(a)スペリングの縮約。例，カーロウ州の Lorum（Leamhdhruim ラウリム）。(b)硬音軟音の語頭音変化も反映させる。Ballinfoyle（Baile an Phoill）バラ・フォイル「穴の町」。Gortnaboul（Gort na bpoll）ゴルト・ナ・ポル「穴の畑」。(2)英語で発音しやすくする音訳（原語の意味が変わってもそれに近い，意味は違っても音が似ている英語の単語を当てはめる。この場合，もとの地名の意味は消えてしまう。）Ardfield（Ard Ó bhFichallaigh アルド・オー・ウィハリー「イー・イヒャラハ（人名）の高台」），Donnybrook（Domhnach Broc ドゥーナハ・ブロク「聖ブロクの教会」），Longford（An Longfort ア・ロングフォルト「砦」）。(3)翻訳 Broadford（An tÁth Leathan ア・ター・リャハン「広い浅瀬」）。もとのアイルランド語が複数形であるので，それを英語の複数形で表す例もある。Killybegs（Cealla Beaga キャラ・ビャガ「小さな教会」。(4)アイルランド名が英語の形を装ったもの。ダブリンのフィーニクス・パーク Phoenix Park はアイルランド語で Páirc an Fhionnuisce パールカ・ユニシュケ「澄んだ水の園」。

地名の英語化というより英語音化は，土地支配の必須の事業であり，イギリスによるアイルランドの完全支配のためには，地名の確定，標準化が必要であった。1825～1841年にわたってアイルランドで陸地測量が行われ，1846年までに全土にわたる6インチ/1マイル地図が作成された。陸地測量の主たる目的

Hosei University Repository

は課税制度改革の土地建物の評価基礎資料作りであった。

測量と並行して，地誌班が設けられ，その班員は約6万項目の地名を検証し標準化する作業にあたった。各地の自然，植物，歴史，伝承，社会経済について詳細な情報が集められた。特記すべきは，ジョン・オドノバン，ユージーン・オカリー，エドワード・オライリー，ジョージ・ピートリーなどのアイルランド学者もこの作業に参加し，アイルランドの古代史，中世史，民俗についての情報を盛り込んだことである。残念ながら1840年にこのプロジェクトは中断されたが，幸い，一部を除いて未刊ではあるものの，その作業に関する書簡やフィールドノートを集めた『陸地測量書簡集』が残っている。

クレア州フィークル教区について，オドノバンの書簡にはつぎのようことが書いてある[7]。「フィークル」はアイルランド語フィアカル「歯」の意か。この地の伝説では，守護聖人の歯が落ちてそこに教会を建てたということになっている。フィークルの守護聖人は聖モホンナというが，聖人暦には記載されていない。1780年，フィークル出身のブライアン・メリマンが『真夜中の法廷』を書いたときにあったというその教会の跡には今新しいプロテスタントの教会がある。

美しい湖，ロホ・グレーネについては，「太陽の湖」の意味にとられることが多いが，むしろ「グリアンの湖」つまり「グリアンと呼ばれる場所の湖」ではないか。グリアンが美しい王女でこの湖でおぼれたかどうかは疑わしい。確かなのは，湖を見下ろす有名なエフトゲ山にグリアンという名の場所があったということである。

ロホ・グレーネはメリマンの詩のはじめに出てくる。「ロホ・グレーネを見ると私の心は躍る。」メリマン（本当の姓はマク・ミャンマン）はがっちりした体格の黒髪の男だったと彼をよく知っていた老人たちが言っている。湖の近くに小さな畑を持ち，ヘッジスクールを開いていたという。二人の娘が誘拐されるのを恐れて，リムリックへ移転してそこで教師をして，30年ほど前に死んだという。娘たちは今ロンドンに住んでいるということである。スウィフトのような作家が彼の詩を英訳してくれたらと思う。

このように教区毎に詳細な記述が続く。

1837年に出版され，各地の社会経済状況も記載してあるSamuel Lewisの『アイルランド地誌辞典』*A Topographical Dictionary of Ireland*では，まだつづりにぶれがあったが，*The Parliamentary Gazetteer of Ireland*（1845-46

Hosei University Repository

年）でアイルランドの英語の地名の標準化はほぼ完成した。

地名の呪い

アイルランド語の地名がかき消されて久しい。道路標識や通りの名を英語とアイルランド語の二ヶ国語表記にしたり，地図に一部の地名についてアイルランド語も併記することは行われているが，これらにおいてはアイルランド語の地名は実質的に機能せず，単なる飾りラベルにすぎない。アイルランドの地名は消滅し，土地の記憶は封印されたままである。封印した記憶を呼び起こす方法はないものだろうか。

シェーマス・ヒーニーは『迷えるスイーニー』（1983年）の翻訳の際，自由にアイルランド語の地名を英語化したと序文に言っているが，キルリーガン（アイルランド語はケル・リアガーン），クルーンキル（クルアン・キリ），ドラムフリー（ドリム・フリーフ），ドラムダフ（ドリム・ダヴ），キルスーニー（ケル・イー・スーニー），クリーガイル（クリーフ・ガイル），グラスガリ（グラス・ガイル）という英語音化は，ヒーニー独特の英語音化ではなく，伝統的な方法をそのまま利用している。アイルランド語の音と意味を蘇らせるような方法を考えてくれればよかったのに，ヒーニーはそれらの地名のもとはアイルランド語だと言うだけである。

イエイツの初期の詩に，「湖の小島イニスフリー」がある。イニスフリーはスライゴー州ギル湖の小島 Innisfree である。アイルランド語の島名はイニシ・フリー（Inis Fraoigh（Fraich）「ヒースの島」）。この英語の地名は，意味は違っても音が似ている単語を充てるというやり方で，地名の英語化の方法の中で，アイルランド語に対してもっとも破壊的である。むしろまったく新しく英語の地名をつけてくれた方がその土地に意味をもたらしてくれたのに，イエイツはその呪われたつづりの持つ free「自由」という語義を悪用してしまっている。このロンドン発の感傷的なユートピア詩に，最後のアイルランドの上王の血筋を引くカタル・クロブデルグ・オーコンホヴァルが亡くなった1244年に，この島でフェルガル・マク・タカダーンがコンホバル・マク・ティゲルナーンによって矯殺されたという禍々しい土地の記憶は読み取れるはずもない[8]。

このようなヒーニーやイエイツの行為を，マイルズ・ナ・ゴパリーン（フラン・オブライエンのもう一つのペンネーム）『貧しい口』（1941年）はつぎの

Hosei University Repository

ように批判する。小学校の最初の日，先生に英語で，名前は？と聞かれるが，英語が分からないので戸惑っていると，他の子供が教えてくれたので，先祖をたどって，自分の名前はディアルマドのシェーマスのショーンのモーレのトマースのソルハのオーンのピャダルのミヒャランジェローのボーナパールトと答えようとする。ところが先生に遮られ，オールで頭蓋骨をしたたか叩かれ，血だらけになった。お前の名前はジャムズ・オドネルだと決めつけられた。つぎの子もそのようにされ，あたり血の海となる。どの子もみんな名前はジャムズ・オドネルだというのである。家に帰って（アラン島の子はかわいそうに泳いで帰った）母親にその話をし，ジャムズ・オドネルは子沢山だねと言うと，学校に入った最初の日はみんなそのような目に会うのだという。爺さんも子供の頃，やはり学校で同じように叩かれ，ジャムズ・オドネルと呼ばれたというのだ。

地名の呪いの行き着く先は，サミュエル・ベケットの地名のない物語『モロイ』（仏語版 1951 年，英語版 1955 年）である。私は地名のない平野，海岸，丘の連なり，谷間，道を行くのだが，地名は喪失しているし，旅は時を喪失しているため，旅は進まない。ただし，モロイという国があってバリーと呼ばれている。そのバリーとそれに属する土地のことを言いたいときには，バリバと呼ぶ。（アイルランド語のバレ「町，場所」，英語化してバリが下敷きになっている。）人によってはもったいぶって町と呼び，別の人には村にすぎないと思われていた集落と，そのまわりの野良から成っていた。バリバの人口は少なかった。土地は耕作向きではなかった。いくらかでも田畑，あるいは牧草地が広がるやいなや，聖なる森か，湿地帯にぶつかってしまう。そこからとれるのは，質の悪い少量の泥炭か，柏の埋もれ木の断片，つまり護符やペーパーナイフやナプキンの輪やロザリオなどといったがらくたでしかない。英語のバリの後に第二要素が加わってできる地名は無数にある。ベケットはアイルランドの地名をこの一語で抽象しているのだ。

『マロウンは死ぬ』（仏語版 1951 年，英語版 1958 年）にも地名がなく，物語を語ろうとするが，物語の存在証明を得ることができない。ベケットはアイルランド語・英語関係なく，地名を喪失させて，いっそのこと文化的アイデンティティも歴史もひっくるめて地名の束縛から逃れることにしたのだ。

Hosei University Repository

英語化のジレンマ

呪われたアイルランドの地名はその後どうなったのか。舞台の時を1833年に設定したブライアン・フリール『トランスレーションズ』(1980年) 第2幕第1場は，アイルランド語の地名をアイルランド語の音に近い英語の発音に変える。あるいは意味を英語の名前に翻訳する作業の場面である。

司祭が住んでいる場所が分かるかい？リス・ナ・ムックだ，その，近くの……いや，リス・ナ・ムックではないんだ。リス・ナ・ムック，豚の砦，これがスワインフォートになったんだよ。(1ページに地名が一つずつ書いてある地名簿のページを繰りながら) それでスワインフォートに行くためにはグリーンキャスルとフェアヘッドとストランドヒルとゴートとホワイトプレインズを通って行くんだ。それに新しい学校はポール・ナ・グイーラフではなくて，シープスロックにあるんだ。行き方はわかるかい[9]。

これはアイルランド語の地名が抹消される瞬間であり，間違いなく土着文化の破壊行為である。イギリスの軍事的，経済的，文化的帝国主義は強力になり，具体的に地名の英語化により，アイルランド人の共有の記憶も薄れつつあった。植民地化されるにつれて，地名に英語が侵入していくが，それに応じて土地の記憶は封印され，アイルランドの物語は断絶したのである。

このような中でアイルランド人のとるべき態度は，なおアイルランドの過去にしがみつくのか，それとも侵略者の言語を自分のものにして，その言語を武器にして植民する側と戦い，ひいては自分の文化と生活を活性化することなのか。侵略され，文化を破壊されることは，経済的損失であり，文化的断絶であるのはまちがいがないことだが，19世紀のはじめの状況では，アイルランドの過去にしがみつき，アイルランド語の維持に精力を使うことはむしろ生き残りを危うくさせるものであった。フリールの舞台の1833年には，すでにアイルランド語は衰退へ向かい，もはや維持できる状態にはなかった。すでに英語はアイルランド人の生き残りのために必要な道具になっていたのだ。

「(地名簿を指して) こういう新しい名前を覚えなければならないんだな。」「自分たちがどこに住んでいるかを知らなければならないんだ。そういう名前を自分のものとしなければならない。そういう名前の中で暮らしていかなければならないんだな。」「我々を形づくっているのは文字どおりの過去，つまり歴

Hosei University Repository

史のいわゆる「事実」というものではなく，言語の中に具体的に現れた過去の姿だということだ。」「我々は言語の中にある過去の姿というものを新たに作り出すことをやめてはいけないのだ。一度やめてしまうと，我々は化石となってしまうからだ。」[10]

アイルランド人が選んだ方策は帝国的経済の中で戦うことであった。アイルランドの政治家は英語を使ってカトリックの解放活動を展開し，独立運動をした。アイルランド語の衰退は，イギリスが直接に抑圧したのではなく，むしろアイルランド人の方で政治的にも英語化したのである。大飢饉がアイルランド語に壊滅的打撃を与えたのは間違いないことだが，実はその前から英語化は急速に進んでいて，たとえ飢饉が起きなくても，おそらく19世紀後半には英語化は完成していた。これは一つの世代の決断であったのである。

キルケニー州カランのハンフリー・オサリバンの日記[11]にこの急速な過渡期の証言が見られる。1827年5月14日，私が今書いているアイルランド語が消滅するまでまだ長い時間かかることはあるのだろうか。立派な大きな学校がこの新しい言語，イングランドの英語を教えるために毎日のように建てられている。それなのに，流麗で繊細なアイルランド語にはだれも関心を持たない。アイルランド人を新しい呪われた宗教に引き込もうとするメソジストの輩を除いて。1828年1月5日，サクソン人の英語は日に日に我々の母語より優勢になっている。

何もしないより，変化に対応することにより，自分自身の文化を活性化させることができるかもしれない。しかし，この二律背反はすさまじい。冷酷な帝国主義の下で自国の文化にこだわることができず，英語に頼らざるをえない。その状態でどれだけの抵抗ができるのか。アイルランド語を捨て，英語を使ってアイルランドの栄光を主張するという，他人から見れば偽善的な行為に自分の良心がどれだけ耐えられるのか。

地名の蘇り

究極の自省的苦痛の中で，フリールは，地名が消滅し物語は衰退したが，アイルランド語の復活がなくても土地の記憶の封印を解くことの可能性を示唆しているように思われる。英語の地名に変わった後も，土地が人によって記憶されているかぎりは，あるいは過去の地名が記憶されているかぎりは，物語は継

Hosei University Repository

続するのではないだろうか。

20 世紀の終わり頃からは，アイルランド語の文学者とアイルランドの英語の文学者とが互いを尊重しあい，文学の二言語状態から積極的に活力を引き出すようになってきた。同じ作品の二言語版を出すという形もその一例で，互いの文学伝統を理解し合うようになった。地名における重層性はかつて伝統の葛藤と死をもたらしたが，下敷きになったアイルランド語の地名は異界にあたり，過去の者が現在に生まれかわって新しく語る物語は蘇った現在の状況であり，単に消え去った過去ではないと信じることで，むしろ二言語状態が物語の再生の起動力になりうるのかもしれない。すでにそれを予兆させるシングとジョイスの作品があった。

アラン島の真ん中の島にあるドゥーン・ホンフール「コンフールの城砦」について，ジョン・ミリングトン・シング（『アラン島』1907 年）が言う。島にある異教時代の城砦であるドゥーンの大きいのが，私の宿からすぐのところにある。私は卵や塩漬け豚の食事の後，石の上でぼんやりしながら煙草を吹かそうと，よくそこに登る。近所の人たちは私のこの習慣を知っていて，よくぶらっと上って来ては，私が最近受け取った新聞に何か変った事は載っているかと聞いたり，アメリカの戦争について尋ねたりする。だれも来なければ，フィル・ヴォルグ族の触った石に本を開いたまま立てかけて，太陽のぬくもりを受けていい気持ちで何時間も眠る。

夕暮れ時，この石垣の砦に登るとプーカ（妖精）に出会い，昔話を聞くことができる。つい数十年前の哀しい話もある。イニシマーン島が大西洋の荒波に削られるように，若い人達が本土やアメリカやイギリスへの移民のために一人また一人と島から離れて行った。彼らの土地の記憶は，兄弟が漁で海難にあった思いも交えて，砦から見下ろす教会の周りをうねり回る風と海の音を使って語られるのである。スティーヴンもショーンも大嵐に飲み込まれた。後になってゴールデン・マウスのグレゴリー湾で見つかった。ふたりとも板に載せられ，あの戸口を通って運ばれてきた。だれも永遠に生きることなんかできない，私たちはそれに満足するしかない（『海へ乗り行く者』1903 年）。

ジェイムズ・ジョイスの『ダブリンの市民』（1914 年）の最終話「死者たち」では，肉体的に，精神的に，社会的に，年齢的に死に掛かっている人たちと，すでに死んだ詩人や歌手，消滅しつつあるアイルランド語とアイルランド語社会，妻の少女時代の夭折した恋人，さらに長いアイルランドの歴史の中に埋も

Hosei University Repository

れた人々と事件と生の営みなど昔の思い出が語られたあと，アイルランド語文化の地層が地名によって掘り起こされる。

西への旅に出る時が来た。まさしく，新聞通りだ。雪はアイルランドじゅうに降っている。暗い中央平原の各地にも，木の生えていない丘陵にも降り，アレンの泥炭地にもやさしく降り，さらに西では，暗く騒ぎ立てるシャノン川の波にもやさしく降っている。

アレンの泥炭地はアイルランド語でモーイン・アルマイネで，英国の川の名前 Aln あるいは Alwyn からきた英語の Allen とは関係がない。キナイド・ウア・アルタカーン（975 年没）による英雄の死についての詩には，718 年没のレンスター王フェルガルについて「フェルガル，美しい姿，モーイン・アルマイネの戦いに斃れる」とある[12]。

シャノン川はアイルランド最長の川で，北アイルランドとの国境を水源とし，中央平原を南下し，アレン湖，リー湖，デルグ湖を貫流し，アイルランドを東西に分け，リムリックから大西洋に注ぐ。『ディンヘンハス』にはシャノン川「シナン」という名についていくつかの起源が記してある。そのうちの一つによると，魔力を持ったハシバミの実がシャノン川を含む七つの川の水源である泉に落ちた。実の汁から神秘的な泡が立った。トゥアタ・デー・ダナン神族出の美しい乙女シナンは緑に流れる川の美しい神秘的な泡に魅せられ溺れた。川はシナンという名前になった。

雪は，また，マイクル・フューリーが埋葬されている丘の上のさびしい教会墓地のすみずみにも降っている。ゆがんだ十字架や墓石の上に，小さな門の槍の先に，枯れた茨の上にも，厚く降り積もっている。彼の魂は，雪が宇宙に降っていくかすかな音を聞きながら，しだいに意識を失っていった。最後の時が降りてくるように，雪はしんしんとすべての生者たちと死者たちの上に降っていた。

《注》

（1） Elizabeth A. Gray ed., *Cath Maige Tuired*, 1982.
（2） Cecile O'Rahilly ed., *Táin Bó Cúailnge*, Recension I, 1976.
（3） Edward Gwynn ed., *The Metrical Dindsenchas*, Parts I-V, 1903-1935.
（4） J. G. O'Keeffe ed., *Buile Suibhne*, Irish Texts Society, 1913.
（5） R. A. Stewart Macalister ed., *Lebor Gabála Érenn*, Parts I-V, 1938-1956.
（6） Whitley Stokes, *Cóir Anmann* (Fitness of Names), *Irische Texte* 3-2, 1897.

Hosei University Repository

(7) John O'Donovan & Eugene Curry, *The Antiquities of County Clare*, 1997, pp. 182-195

(8) John O'Donovan ed., *Annals of the Kingdom of Ireland, by the Four Masters*, Vol. III, 1854. William M. Hennessy ed., *Annals of Loch Cé*, Vol. I, 1871.

(9) 清水重夫訳「トランスレーションズ」『ブライアン・フリール』新水社, 1994.

(10) 同上。

(11) Michael McGrath ed., *Cinnlae Amhlaoibh Uí Shúileabháin*, Parts I-IV, 1936-1937.

(12) Whitley Stokes ed., "On the deaths of some Irish heroes" *Revue celtique* XXIII, 1902, pp. 312-313. Cf. Gerard Murphy, "On the dates of two sources used in the Thurneysen's Heldensage, II. Was Cináed úa Artacáin († 975) the author of Fianna bátar I nEmain?" *Ériu* XVI, 1952, pp. 151-156.

(本稿は, 2004年度法政大学「国内研究」の成果の一部である。)

(アイルランド語学文学・経営学部教授)